5月度生涯研

接着ブリッジは〝MI〟

正確な歯面処理法など紹介

協会の歯科臨床・学術学会部は5月18日、5月度生涯研修講座「最小限の生体侵襲による効果的な欠損補綴法―接着ブリッジ―」をM&Dホールで開いた。講師は、大阪大学顎口腔機能再建学教授である矢谷博文氏が務めた。新たに保険導入されたテーマであったため、97人の参加があり盛会であった。

矢谷氏は、現代の医療はDOSからPOSへとパラダイムがシフトして行く時代であり、生体侵襲を最小限にするMI（Minimum Intervention）という概念が浸透し、その最大の担い手は接着歯学であると強調した。

接着歯学の歴史については、1980年の岡山大学の山下敦教授の発表が世界的にも現在の礎になっていると述べ、これまで取り組んでこられた歯質ならびに金属の表面処理法、接着ブリッジのリテイナー（支台歯）のデザイン、接着阻害因子などに関する基礎研究を紹介された。また、それを臨床応用にまで発展させた金属接着プライマーの効果、象牙質に対するHEMAによるプライミング処理とリン酸処理に続いて、表面のコラーゲン層を除去する目的で行う次亜塩素酸処理に関する研究成果も説明した。

脱離しても生体の侵襲は少ないと説明する矢谷氏＝5月18日、M&Dホール

これらの接着ブリッジの長期予後成績については、岡山大学での臨床応用において、一般的なCr-Brと比較しても10年経過時での生存率は大差なく、正確な金属面処理、歯面処理、リテイナーデザインなどテクニカルな面をクリアさえすれば、脱離に関しては神経質になることはなく、また脱離しても生体に対する侵襲は少なく、リピート・レストレーションできるケースがほとんどであると述べた。

矢谷氏は、最後に「エナメル質は鎧なり」「象牙質は歯髄なり」と講演を締めくくった。

（淀川区・林哲平）

北河内地区

後期高齢者医療制度学習会

参加者から怒りの声が噴出

枚方市内で5月25日、8自治会主催で後期高齢者医療制度に関する学習会が開かれ、市民25人が参加した。講師を務めた小山榮三氏（協会理事・相談役）と広瀬ひとみ氏（枚方市会議員）が制度の内容や影響について解説した。

参加した市民からは「医療施設が少ないから医療が制限されるならまだしも、医療施設はたくさんあるのに、月6千円に上限が決められて、医療にかかれなくなるのはおかしい。まさに差別医療だ」「長く入院もできない、リハビリも打ち切られ在宅の受け皿もない。まさに姥捨て山法だ。これでは安心して生きていけない」と怒りや戸惑いの声が噴出した。

小山氏は「国の予算が国民の生活のために振り分けられていない。この制度には弱者切り捨ての市場優先主義が顕著にあらわれている」と指摘し、「後期高齢者医療制度は中止・撤回しかない」と訴えた。

5月15日に行われた反対集会の様子を話す小山氏＝5月25日、枚方市内

歯周病と全身疾患―特に関係ある糖尿病について③

土井英暉（東成区）

糖尿病患者では、内臓の脂肪細胞からアディポサイトカイン（TNF-α）が産生分泌されている。内臓脂肪蓄積時には、「TNF-α」の分泌異常が生じ、多彩な病態へと繋がる。

一方、歯周炎でも同種の生理活性物質の「TNF-α」が放出され歯周病を悪化させる。歯周ポケットに歯周病菌が繁殖すると、免疫細胞である白血球が歯周病菌を退治するために集まってくる。白血球が歯周病菌の出す毒素に触れてある物質を放出する。この物質が「TNF-α」である。

TNF-αによる歯周組織破壊のメカニズムが糖尿病と似ていることから、血液を介して何らかの相関関係があるのではないかと研究が進められてきた結果、歯周病が糖尿病を悪化させ、また、糖尿病が歯周病を悪化させることが近年の研究で判明してきた。

TNF-αは血液中のインスリンの働きを妨げる作用（インスリンの抵抗性）がある。歯周病や糖尿病でTNF-αを多く放出している場合、インスリンの働きが低下し余ったブドウ糖が血液中に溜まり、高血糖となり糖尿病が一気に進行する。

糖尿病になると糖質の代謝が低下し、糖質をエネルギー源として営む各組織の活動に影響が出る。脂肪や蛋白の代謝まで阻害され、アンモニア・ケトン体の代謝産物が体内に溜まり酸性体質となり、生体の免疫力は低下する。

この事により、歯周病による歯茎の炎症が悪化するにつれてさらにTNF-αが多く放出される一方、糖尿病による脂肪細胞からもTNF-αが放出され、これらの相乗作用により糖尿病・歯周病もますます悪化する。

この悪循環をくり返すと、軽度の糖尿病・歯周病もともに重度の疾患へと進展する。

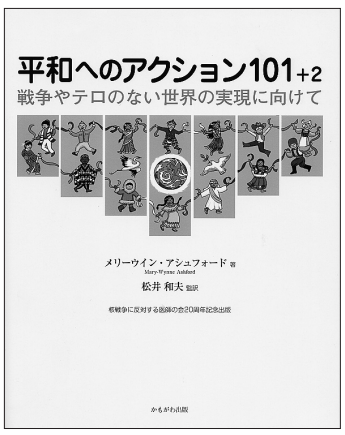
歯周病を治療したり抗生物質を飲用し歯周病が良くなると、インスリンの必要量も減ってくる。さらに歯周病治療を行うことで、歯周局所からの持続的な「TNF-α」「IL-6」「IL-1β」の産生が減少するとともに、炎症が軽減消失する。その結果インスリン抵抗性及び、血糖コントロール状態が改善し、HbA1c値が低下する。

HbA1cが1%減ることは、相当意義がある。糖尿病に関連した死亡（心筋梗塞含む）の危険度は25%も軽減された。また、心筋梗塞発病のリスクが18%減、脳卒中の発生リスクが15%減、と報告されている。さらに、手足の切断が40%、失明（網膜症）の原因となる小血管の障害が30%改善されるというデータもある。（つづく）

日常の歯科臨床 ➡ 118

「日常の歯科臨床」では、皆さんからの投稿を募集しています。

ほんBook



かもがわ出版（2730円）。協会価格2600円（在庫限りあり）

「戦争なんて、なくならない」そう思い込んでいませんか？世界各国の創造的な活動から学ぶ、誰でもできる平和の実践法101＋2例。

本書は核戦争に反対する医師の会が、発足後20周年を記念して出版した。原著は「ENOUGH BLOOD SHED」で、著者はノーベル平和賞を受けたIPPNW（核戦争防止国際医師会議）の元共同議長のメリーウイン・アシュフォード氏。

彼女は次のように語っている。「まさかこの本を書くことで、私の世界観がこれほど変わることなど予想もしていませんでした。いま世界の市民社会が、暴力、気候変動、人権、環境悪化などに取り組んでいます。私が聞いた話はどれも驚くほど創造性に富み、勇敢かつ大胆なものです。さまざまな話を聞くうちに、私の絶望は楽観主義に変わっていきました。なぜなら、人間はたとえどれほど恐ろしい状況にあっても、憎しみや復讐の念を乗り越え、高潔と献身をもって行動できると分かったからです」と。

本書をひも解くと、いかに自分が無知であるかを思い知らされた。同時に、知ることの喜びと戦争や暴力をなくす具体的な解決法に感動した。

39例目に、英国の権威ある医学雑誌「ランセット」の編集長が「ランセットを読んでも世界観は変わらない！」と話している。本書を読むと、IPPNW提唱のICAN（核兵器廃絶のためのキャンペーン）に参加することにもなるだろう。

なお、「＋2」とあるのは、日本人のための2つの解決法「ヒロシマ・ナガサキを風化させない」と「平和憲法を世界に広げよう」の2例を監訳者の松井和夫氏が補筆したものである。是非ご一読ください。

（堺市・山上紘志）

第23回 医療研究集会の演題募集　テーマ「生命（いのち）―その重さと尊さ　生命（いのち）―その喜びと希望」

分科会・ポスターセッションの演題募集期間を延長！＜6月末日まで＞

今回の開催地は宮城県です。「生命―その重さと尊さ　生命―その喜びと希望」をメインテーマに、ジャーナリスト（朝日新聞記者）・伊藤千尋氏の記念講演「人の活き活きと生きる社会―特派員が見た世界から」、共同調査「開業医の病診連携に関する実態調査」結果報告、「戦争と医療」「子育て支援」「働く人の健康と過労自殺」の3つのシンポジウムなどを予定しています。

また、日常診療の向上を目的として5つのテーマでの分科会やポスターセッションを設けております。主な開催要項は次の通りです。

日　時　10月11日（土）15時～21時（19時～レセプション）
10月12日（日）9時～16時

会　場　仙台国際センター

申込み　TEL06-6568-7731

内　容

10月11日（土）

●共同調査報告
「開業医の病診連携に関する実態調査」

●記念講演
「人の活き活きと生きる社会―特派員が見た世界から」　ジャーナリスト・伊藤 千尋 氏

10月12日（日）

●分科会等（午前）
①在宅医療・介護／②医科／③歯科診療の研究と工夫／④公害・環境・職業病／⑤医学史・医療運動史・医療と裁判／ポスターセッション

●シンポジウム（午後）
①「戦争と医療～東北の視点から」②「子育て支援―悩める思春期」③「過重労働、成果主義時代の過労自殺の特徴と対策」

主　催　全国保険医団体連合会